HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	『祖国の砂　日本無名詩集』を跡付ける　第四回
著者	石井，耕；ISHII，Kou
引用	北海学園大学学園論集(180)：1-23
発行日	2019-11-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

『祖国の砂　日本無名詩集』を跡付ける　第四回

石　井　　耕

K　九州　4人

ここでは，矢山みつ，大場康二郎，井上光晴，谷川雁の4人を取り上げた。

K-1　矢山みつ　「わたしゃにくい」

作者紹介によれば，矢山みつは1918年7月17日生れの33歳である。朝倉高等女学校を卒業後，福岡県馬田小学校で教員をしていた。その後満州に渡り，新京の満州土建協会で勤務，2年後結婚のため退職。1946年引揚げた。居住地は福岡県朝倉郡甘木（現朝倉市）である。所属する文学サークルとして，『平和のうたごえ』『福岡人民文学サークル』を挙げている。後者は人民文学の福岡におけるサークルであろう。

重要なことは，「平和のこえ」事件のため逮捕されたことである。不二出版から復刻された『新女性』1951年9月号（第11号）では，本名で「嵐のなかで〈真実の記〉」と題して，「平和のこえ」事件について，手記を書いている。

二人のこどもの母親である矢山は，1951年2月4日早朝，7，8名の武装警官によって家宅捜索を受けた。「「平和のこえ」新聞をはじめ，党関係一切のものを押収した。」そして，逮捕されたのである。「平和のこえ」というのは，発禁となったアカハタの後継紙とみなされていたのである。5月21日判決があり，「懲役10ヵ月執行猶予3年」であった。矢山はすぐに控訴し，その後最高裁に上告した。そして1952年占領の終了によって，占領当時の政令325号違反については，原判決を破棄し，免訴となった。例えば，毎日新聞1953年7月22日夕刊に，岩手県釜石での「平和のこえ」配布について，地裁・高裁での判決を覆して免訴となった記事が掲載されている。福岡での事件も，1954年4月14日の最高裁判決によって，免訴となっている。

また，矢山みつの掲載詩「わたしゃにくい」は，農地に関する「交換分合」という配分の方法についての抗議が，テーマである。「交換分合」とは，1949年11月25日の農林省農地局長の通達では「わが農業の欠点である農地等の著しい分散状態を是正」「農業近代化の基礎条件を付与しようとする意図を持つ」とされている（現在もこの仕組みはある）。とくに，「部落，村の総合性に欠けた計画であってはならない。」

村の計画は，結局それぞれの農家とくに零細な農家の意向を無視して，「村のために」ということで，不利な農地交換を強いるということになってしまったのである。零細農家だったらしい矢山みつは，村の多勢に抗議しているのである。掲載詩の一節である。

「おなごのくせに
　あんた一人が反対しとるばい
　ほんに恐ろしい女子じゃ
　村のやぶれ者じゃ
　ちったあ村のことを考えて貰わにゃ」
「ああ　やぶれ者といわれる
　わたしゃ腹が立つ
　自分たちばかりいいことして
　困った者のくらしを
　目茶目茶にする顔役が ――
　わたしゃ　にくい
　わたしゃ　にくい」

K-2　大場康二郎　「橋で」

作者紹介によれば，大場康二郎は「東京都　1919年1月14日生れ　満33歳　1939年大阪外語大露語部卒。同盟通信社等主として新聞社を転々。十数種の様々な職場を経て，現在英露文学の翻訳に従う。『S港通信』(佐世保)」となっている。在住地は東京だが，以下の経緯から九州に含めた。

「井上光晴年譜」によれば，1948年11月，大場康二郎との共著詩集『すばらしき人間群』を刊行。出版社は新日本文学会長崎支部（九州評論社かもしれない)。1956年の近代生活社版では，井上光晴の単著となっている。大場康二郎は，1956年版で，解説を書いている。「昭和22年の冬，北九州のあるあばら家の二階，うすぐらい電灯の下で，いまは瀕死の病床にある増田寅雄（元日本共産党九州地方委員会議長代理，分派で除名され，六全協で復活した）と日共全国オルグ，小林薫と大場の三人」

大場康二郎は日本共産党の全国オルグとして，九州に派遣されていたのである。

> 「「そがんふうな意味でも井上の《ひよこ草》はよかねえ」マスダ・コオがぼそりと言った。」「《麦》はセピア色，ケントラシャ表紙，センカにガリバン刷，A6判の小片であった。」「マスダ・コオは，そのくるしみとよろこびと，そのにくしみと，悲しみとのすべてをこめて，この小冊を切った，つくったにちがいない。これが大場が，当時二十一才の井上を知ったはじめての機会であった。」

井上光晴の「大場康二郎」では，当時の状況がありありと描かれている。

「1948 年，佐世保より転出して日本共産党九州地方委員会に所属する常任として凄絶な生活をおくる彼（大場）と出会うことになる」「やや誇らしげに「自分ノ勤務先ハ，福岡市上名島町 52 日共福岡地方（当時）委員会」と記されている。」「1919 年（大正 8 年）1 月生まれの大場康二郎は，この年 27 歳。大阪外語露語科を終えて同盟通信に勤務，1943 年（昭和 18 年）に美也子夫人と結婚しており，すでに娘二人が生れていた。」

「日共九州地方委員会で，出版と財政を担当することになった私の部署に，他の常任とともに大場康二郎も配属されてきた。彼との交友はそこから始まるのだが，党生活の激務に反して，収入零（或いは雀の涙）という人間のくらしとも見えぬ日々のなかで，四合瓶の焼酎を前に，文学を論ずる夜こそ，何にもまして互いに解放を感ずるひと時であった。」「それとても美也子夫人のハーフコートの化けた焼酎であり」「あるかなしかの常任費はそれこそ配給を受ける代にも足りなかった。独り者の私は方々に顔を突っ込んで何とか食いつなげても，家族持ちはどうしようもない。」

「1949 年秋，彼と家族はついに誰にも行方を告げぬまま，福岡を脱出した。」「日共の常任生活を自ら放棄したのである。配給さえ取らぬくらしの中で壊滅するより，妻と幼い娘二人だけでも生かす道を選んだのだ。ひっそりと高槻市に移住する迄の前後の経過を，私だけは知っていたが，党機関の追及に対してむろん頭を振りつづけた。それから三年，就職を日共に妨害された彼は，さらに上京して，食いつなぐために翻訳の下請けを業とする。1952 年 2 月 4 日，佐世保基地に居住する私の手許に（手紙は）届いた。」「その手紙をみた一ヵ月後，私は上京し，何年ぶりかで彼に会った。」

引用が長くなったが，井上光晴のヴィヴィッドな語りが全てを表現している。まさに「書かれざる一章」の世界である。

その後，大場康二郎は『コスモス』18 号（1957 年 5 月）に「白い鴉」を発表している。

1974 年 9 月 11 日逝去された。享年 55 歳であった。

K-3　井上光晴　「祖国喪失」「廃港」

作者紹介は次の通りである。「長崎県佐世保市　1926 年 5 月 15 日生れ　26 歳　電波科学専門学校卒。少年時代，共和製鋼所（大阪市），崎戸炭鉱（長崎県）で働く。学卒後陸軍技術研究所にしばらくおり，終戦後主として文化運動に従う。『新日本文学』」

ただし，よく知られているようにこれはかなり怪しい。井上光晴の「自筆年譜」にも，戦前・戦中についてはさらに詳しく書かれているが，松本健一が「虚構の自伝」で指摘しているように，戦前・戦中までは，多くの箇所が「虚構」だという。最初にそのことを指摘したのは映画『全身小説家』の監督原一男である。松本健一が，川西正明などの資料をもとにした年譜を作成している。例えば，崎戸炭鉱で働いたのは「炭鉱技術養成所で数学を教える」ことだった。これは『虚

構のクレーン』で描かれている。「陸軍技術研究所（松本年譜では未確認）」もはっきりしない。

松本の作成した年譜では，兵役について「1945年2月佐世保で徴兵検査をうけるため帰郷する。第一乙合格。6月佐世保大空襲。入営命令書をうけたが（？），入営まえに敗戦となった。」と書かれている。

終戦後はほぼ「自筆年譜」通りのようである。「葱と激流」『無名時代の私』（元は『文藝春秋』1989年12月号）によれば，次のような生き方をしていたようだ。

「1945年10月，日本共産党長崎地方委員会（当時）の創設に参加。1946年1月，竹森久次を代表とする九州評論社（佐世保）をともに創立して入社。翌年，編集責任者となる。48年秋から日共九州地方委員会の常任として福岡に移り，財政を担当し，人民科学社（出版，文化部門の別名）の代表責任者を兼ねた。

九州評論社では紙の調達から編集，企画，校正，セールス，集金まで，およそ出版に関係するあらゆる仕事をした。」

「九州地方委の常任になると，とにかく金がなかった。」「泥のような自負にまみれた時代というべきか。渇いた情熱のみを生きざまに，私は恰好だけをつけていた。」

1951年は「佐世保で米軍輸送船作業に従事し，労働者の反戦活動を組織する。」横須賀同様旧軍港には，多くの朝鮮特需がもたらされたのである。

その中で，「書かれざる一章」（1950年），「病める部分」（1951年）を『新日本文学』に発表した。井上光晴にとっても重要な著作であったが，同時に『新日本文学』の編集部そして読者にも大きな衝撃を与えた。「なぜ，このような作品を掲載するのか」という読者からの反発の声も掲載されている。

そして，1952年から『近代文学』『中央公論』『群像』など『新日本文学』以外に作品を発表しはじめている。1952年の『祖国の砂』刊行時点において，井上光晴が「無名」ではなかったかどうか，1952年は「無名」と「有名」のちょうど分岐点に立っていたといえよう。

いずれにせよ，新日本文学会の中央委員として，「佐世保」にとどまっていたのである。1953年日本共産党離党，1955年復党拒否。

そして，1956年，結婚。いよいよ佐世保より上京する。

K-4　谷川雁　「故郷」「革命」

作者紹介は次の通りである。「熊本県水俣市　1923年12月25日生れ　28歳　東大文学部社会学科1945年10月卒。1945年西日本新聞入社，47年同労組書記長，49年，書記長として争議中編集権問題に関し，占領軍の指示により退社。目下療養中。『母音』（久留米）『角笛』（東京）『九州文学』（福岡）」

齋藤愼爾編の「谷川雁略年譜」に依拠して，上記以外の1952年前後のことをまとめてみよう。

1945年1月　千葉県印旛郡の陸軍野戦重砲隊に入隊。

8 月　敗戦後復員。大学を卒業。西日本新聞社入社，整理部記者となる。
1947 年　『母音』に加わる。
11 月　西日本新聞労働組合の書記長就任，越年資金要求の争議で，活躍。
GHQ と衝突，ゴロツキと規定されて馘首の処分を受ける。（上記では，49 年となっている）
1948 年 3 月　西日本新聞社に復帰すれど結核が悪化して仕事はままならず。
1949 年　日本共産党九州地方委員会に属し，機関紙部長となる。しかし少数派。
1950 年　結核のため水俣へ帰郷。
9 月　『角笛』 1 号に詩「夜明けの人」，『母音』に詩「異邦の朝」を発表。
1951 年 1 月　村立阿蘇中央病院にて療養生活。
1952 年　阿蘇から再び水俣へ帰郷。
8 月　『祖国の砂』に詩「故郷」「革命」を再録。
1954 年 5 月　『母音』に「原点が存在する」発表。
11 月　『大地の商人』が詩 15 篇に「原点が存在する」をあわせた構成で刊行される。
1955 年　この頃，水俣市の新日本窒素肥料附属病院に入院。
9 月　『母音』に「森崎和江への手紙」を発表。森崎和江「谷川雁への返信」も掲載。
10 月　胸郭形成手術を受ける。退院後，失業対策と療養を兼ねて小間物屋を開く。
1956 年 1 月　『母音』24 冊（通巻 25 冊）で終刊。
詩集『天山』（国文社）刊行。
1958 年　福岡県遠賀郡中間町（現中間市）へ森崎和江とともに移住。この年 35 歳。
9 月　『サークル村』を上野英信らと創刊。創刊宣言「さらに深く集団の意味を」起草。
11 月　評論集『原点が存在する』（弘文堂）刊行。

この後，サークル村，大正行動隊から大正鉱業退職者同盟まで，工作者・組織者として活躍する。1960 年に，既刊 2 詩集に未収録の詩編を入れた『谷川雁詩集』（国文社）を刊行する。「あとがき」で〈私のなかにあった「瞬間の王」は死んだ〉と書き，以後詩を書かないことを宣言する。

L　在日朝鮮人

L-1　李錦玉（い　くむおく）「あられ」

作者紹介は次の通りである。「東京都　1929 年 1 月 30 日大阪生れ　23 歳　金城女子専門学校（現金城学院大学）国語科卒。民主朝鮮社勤務。『新日本文学』会員」

『新日本文学』1951 年 4 月号に「氷雨の凍える空気の中で ── 宮本百合子の墓前に捧ぐ ──」を，1952 年 6 月号に「あられ」（『祖国の砂』所収），1954 年 3 月号に「おしめの童話」を発表している。「あられ」は『祖国の砂』掲載決定後に『新日本文学』へ掲載されたのである。

李錦玉の勤めていた『民主朝鮮』は，金達寿等の創刊した雑誌である。平田由美（2015)「金達寿」に基づいてその経緯をまとめておこう。

「(金達寿は）朝連横須賀支部の常任委員で，飯場を営む人物から資金援助を受け，印刷所を探し，原稿を書きながら編集作業を行いと，文字通り八面六臂の奮闘で，1946年4月に『民主朝鮮』の刊行にこぎつけている。在日朝鮮人による解放後初の活版印刷雑誌であるだけではなく，4年に及ぶ発行期間からも，発行部数からも，『民主朝鮮』はこの時期有数の雑誌の一つに数えることができる。」「しかし，朝連との強い結びつきは，持続的な発行を支える反面，在日朝鮮人左派メディアとして，この雑誌を厳格な事前検閲の対象にした。」「『民主朝鮮』においては，1948年6月号として刊行する予定だった阪神教育事件特集号が発禁となったのが最大の打撃であった。」「1949年9月の朝連強制解散がダメ押しの一撃となり，」「『民主朝鮮』は事務所を追われ，再び休刊を余儀なくされる。」

いったんは復刊したものの，1950年7月の33号をもって『民主朝鮮』は停刊した。金達寿は，東京に転居し，『新日本文学』などに作品を発表する「職業作家」となる。ガントリークレンの街を離れたのである。

金達寿の本を，筑摩書房から出版したのは，『新日本文学』連載の1954年1月『玄海灘』(装幀難波田龍起）である。次いで，『故国の人』(1956年9月，装幀難波田龍起)，『日本の冬』(1957年4月，装幀永井潔)，『朴達の裁判』(1959年5月）などとなっている。後に『金達寿小説全集』(全7巻，1980年）も刊行されている。『日本の冬』までの単行本は石井立が担当編集者であった。

「戦後は，半失業状態のまま作家生活に入り，専業となったのは『新日本文学』に連載した長編『玄海灘』以後。」(『日本近代文学大事典』）である。「『故国の人』その他により，日本文化人会議より「平和文化賞」を受賞する。」(「金達寿年譜」)

李錦玉は，その後朝鮮新報社に勤務した。朝鮮新報社の『朝鮮画報』は，1962年から1997年まで，421号発行されている。

M　逝去　3人

『祖国の砂』が出版されたとき，すでに亡くなっていた落合みどり，高田芳枝，三枝源七の3人を対象とする。

M-1　落合みどり(落田草子）「心のなえる時に」

落合みどりは，1951年5月29日国立療養所清瀬病院にて逝去。享年31歳であった。「1919年7月21日生れ　東京小石川高等女学校卒。『魚紋』『指向』等に関係していた。」

中村（2014）によれば，1959年10月全国結核療養所詩集『川を海へ』(日本患者同盟）が刊行されている。この中に落田草子名で詩が掲載されている。「故人・清瀬病院」となっている。作者

紹介にある『魚紋』は，国立療養所清瀬病院の詩のサークルである魚紋詩話会の刊行していた詩誌である。療養所文学については，岩田清の項（B-6）参照。

掲載詩の一節である。

「私の寝ている枕辺の壁に
　無数の鋲の跡がある
　黄色い壁にかこまれた
　このわびしい重症室で
　私の前に寝ていた人たちは
　何をはっていたのだろう」

M-2　三枝源七　「背後に花のある風景」

作者紹介は次の通りである。「東京都　1926 年 9 月 30 日生れ　高等小学校卒。1946 年，東京都水道局給水課作業員となる。東京都雇員（水道局配水係勤務）。1951 年 2 月 5 日死去。」

1949 年 4 月東京都水道従業員組合中央執行委員に選出されて以来，亡くなるまで文化部長として文化活動を行った。没後，三枝源七遺稿詩集刊行委員会が，東京都水道従業員組合の中につくられた。

M-3　高田芳枝　「子等よシャベルを持て」

作者紹介は次の通りである。「東京都　1911 年 4 月 15 日生れ　1949 年 12 月 18 日肺病にて死去。『新詩派』『新日本詩人』等に関係していた。」

高田芳枝は，多数の俳句・詩作を発表している。『新詩派』は，1946 年 3 月創刊で，1947 年 11 月まで 8 冊が刊行された。この第 1 巻第 3 号（1946 年 8 月 1 日）に，旧姓大谷芳枝名義で，「跫音」「型づくりもの」を発表している。『新日本詩人』に「遺作詩集」が掲載されており，「子等よシャベルを持て」も載せられている。

夫の高田新は，『新詩派』『新日本詩人』の中心的な書き手であり，毎号のように執筆していた。

N　作者紹介未掲載

N-1　且原純夫　「瓦をつくる」

前述した理由によって，唯一作者紹介は掲載されていない。且原純夫は 1929 年生れで，この年 23 歳，われらの詩の会にいた。掲載詩の「瓦をつくる」は『われらの詩』15 号（1952 年 6 月 25 日発行）に掲載された詩である。且原の詩は駆け込みで『祖国の砂』に掲載されたのである。『われらの詩』15 号の発行前に，筑摩書房に詩の原稿だけが送られたと考えられる。

且原純夫は，川口（2016）によれば，次の通りである。「広島詩人協会で活躍していた峠三吉を中心とする左派文化人と，広島文サ協の且原純夫（中国配電文学サークル『中配文学』），増岡敏和（広島国税局文学サークル『ひろざい』）など職場サークルの有力活動家たちが結集したのが，『われらの詩』であった。」

且原は，中国配電に勤務し，電産（電気産業労働組合）に所属していたが，失職している。掲載詩の「瓦をつくる」は，失職している時のことを描いたと考えられる。1950年頃，電産でレッド・パージにあったのは，他に吉田美千雄（A-5），伊藤習司（J-1），小島義正（B-11）がいる。

掲載詩の一節である。

「組合運動。
　サークル運動。
　それら記憶のすべての代償に，
　退職金と，餞別と，
　閉じられた門扉と，閉じられた唇と。
　── これが過去のはじまりである。」

また，北海道・久保田俊夫の項（J-3）で触れた，1949年の日本製鋼所広島製作所の争議について，且原は「俺たちはもうだまされない ── 日鋼同志の闘いをたたえる」『広島文学サークル』3号（1949年12月）という詩を発表している。『広島文学サークル』は，広島の様々なサークルの連合体として発足し，且原は，発行の実務の中心を担っていた。（『われらの詩』とともに，『広島文学サークル』も三人社から復刻されている。）

日本共産党の分裂にあっては「党派抗争の論理をサークルに持ち込まないという峠や且原らの姿勢もあって，両派は緊張を孕みながらも共存することになる。」「『われらの詩』は，1951年前半から次第に混迷の時期を迎える。」「1953年3月10日の峠の死によって求心力を失い，11月に終刊（20号）を迎えた。」（川口（2016））

『祖国の砂』掲載は，峠の逝去の半年前である。また，

> 「峠の追悼集『風のように　炎のように』（1954年2月）は，「主流派＝『人民文学』派の正当性を前提に，増岡敏和「峠三吉氏の生涯」が冒頭に置かれることになるとともに，且原純夫・佐々木健朗といった，増岡が広島にいなかった時期に重要な役割を果たした人びとの文章が目立たない位置に追いやられる」構成になっている。」（宇野田（2013））

且原「反核の志 ── 峠三吉が問うたもの」『新日本文学』（1983年11・12月号）によれば，次の通りである。「増岡敏和はまもなく公務執行妨害行為をおこして広島から逃亡していて，峠三吉の死後，私が上京するのと入れちがいに広島に帰ってきた」「峠三吉の葬儀を執りしきった私は，生前の峠三吉の希望であったから，棺を赤旗で包んで送った。」

詳しくは後述するが，且原は上京して，その後新日本文学会の事務局で働くようになる。そして，筑摩書房の第一次『中野重治全集』の編集に関わっていくのである。『われらの詩』18 号（1953 年 4 月）のあとがきに「且原さんが東京へ出た。原稿や意見をどんどん送ってきてくれる。東京をしっかり踏まえた詩が出ることを期待しよう。」と書かれている。3 月の峠の逝去，葬儀の直後の上京だったのである。

且原は『戦いの日々：詩集』を 1958 年 12 月，飯塚書店から刊行している。掲載詩の「瓦をつくる」も収録されている。また，新日本文学会事務局員でもあり，『現代詩』の編集部員であり，『新日本文学』の常連の執筆者であった。詩，書評から演劇時評など，その守備範囲は広い。

3　その後の詩人たち

その後の情報を把握できていない人びとも多い。また，浅井徹雄（加能徹）は 36 歳で早逝された。えのき・たかしの 49 歳，大場康二郎の 55 歳での逝去も，早いと言わざるをえない。浅井徹雄は，友人の前田良雄が遺稿詩集を刊行している。えのき・たかしは，友人の古書商などが，遺稿集と追想集を刊行している。大場康二郎には，友人の井上光晴が追悼文を発表している。いずれも周囲の人びとの心に遺る存在だったのである。

他の多くの人びとは，それぞれの生き方を示し続けた。その後の詩人たちについて，得られた情報の範囲でフォローしておきたい。

3−1　生涯，詩とともに

多くの詩人たちが，詩を書き続けた。生涯，詩から離れることはなかった人びとが多数いる。それぞれが詩集を出している。その後の詩人たちにとって，このことはとても重要なことであった。「無名詩集」であり，ほとんどの人びとは，その後も「無名」であったのだが，それでも詩を書き続けたのである。これは『祖国の砂　日本無名詩集』のもっとも誇るべきことであろう。

A　地域リーダー

松永浩介『船底修理』（1953 年），『トッカンカユ』（1962 年），『望郷』（1976 年）など
山田今次『行く手』（1958 年），『でっかい地図』（1969 年），『山田今次全詩集』（1999 年）
清水清『重い彼方』（1975 年）
押切順三『大監獄』（1963 年），『斜坑』（1968 年），『押切順三全詩集』（1977 年）など
吉田美千雄『八月十五日』（1952 年），『壱・間もなく終点』（1956 年）
えのき・たかし『老狙撃兵』（1971 年）
吉田欣一『レールの歌』（1959 年），『吉田欣一詩集』（1965 年），『わが射程』（1975 年）等

錦米次郎『百姓の死』(1962 年),『錦米次郎全詩集』(1998 年)
内田豊清『動く密室』(1977 年)
酒井眞右『日本部落冬物語』(1953 年),『十年』(1957 年),『存在』(1958 年) など

B　ベテラン

木暮真人 (木原実)『漂う草』(1975 年),『木原実全詩集』(1986 年)
合田曠『断層』(1982 年),『Good Night』(1982 年),『合田曠詩集』(1982 年) など

C　農民

北本哲三『健康なやつだけを』(1978 年)
高田正七『風土記』(上 1971 年, 中 1973 年, 下 1976 年)
長沼静人『覚書』(1952 年),『もうひとつの神話』(1968 年),『長い廊下』(1973 年) など

E　学生

滝川貞夫『燃える海流』(1996 年)
草階俊雄『イタリアの空』(1971 年),『泡の建築家』(1985 年) など

F　教員など

加能徹 (浅井徹雄)『浅井徹雄　三十六歳　火の詩集』(1985 年)
柳原真佐夫『掛図』(1980 年),『金銭考』(1984 年)

G　銀行員

千早耿一郎『長江』(1954 年),『黄河』(1983 年),『千早耿一郎詩集』(2007 年) など
石垣りん『私の前にある鍋とお釜と燃ゆる火』(1959 年),『表札など』(1968 年) など

H　国鉄など

高橋兼吉『真珠婚』(1970 年),『合歓木の歌』(1970 年),『冬の滝』(1986 年)
今井朝二『車中の少女』(1972 年)

飯村亀次『制服』（1955 年）

J　北海道

伊藤習司『黒い兵隊』（1957 年）
大場豊吉『すべて気休めの言葉は死ね』（1977 年）
久保田俊夫『三人以上の善人』（1953 年），『薄墨色の絵巻』（1992 年）など

K　九州

井上光晴『すばらしき人間群』（1956 年）など
谷川雁『大地の商人』（1954 年），『天山』（1956 年），『谷川雁詩集』（1960 年）

L　在日朝鮮人

李錦玉『いちど消えたものは』（2004 年）

N　未掲載

且原純夫『戦いの日々』（1958 年），『ジュラ紀の松』（1996 年）

この他にも，山崎正和，安藤美紀夫，蛭間裕人，塚本雄作，柴村羊五など小説，童話，評論，翻訳，戯曲，研究書などを出版した人びとは多い。

また，松永浩介，山田今次，押切順三，北本哲三，錦米次郎，吉田欣一，酒井眞右，且原純夫など地域リーダーの人びとをはじめとして，新日本文学，コスモスなどで継続的に詩などを発表しつづけていた人びとも多い。

3−2　任されていく仕事

徐々に，様々な仕事を任されるようになった人びともいる。例えば，山田今次は，横浜市民ギャラリー館長となり，68 歳まで務めた。押切順三は，県厚生農業協同組合連合会の部長，病院事務長を歴任した。柴村羊五は，化学経済研究所の常務理事を務めた。千早耿一郎は，日本銀行国庫局調査役，百五銀行調査役を務めた。

政治の世界に足を踏み入れた人びともいる。木暮真人（木原実）は，日本社会党衆議院議員であった。また，北本哲三（鎌田喜右衛門）は，秋田市議会議員となり，秋田市議会議長となった。

政治家ではないが，山崎正和は政府の各種審議会等に，長く参加し続けていた。

大学教員になったのは，瀬下良夫（慶應義塾大学），山崎正和（大阪大学等），安藤美紀夫（日本女子大学），滝川貞夫（北海道大学）の4人である。在職中亡くなった安藤美紀夫を除けば，定年退職まで勤めている。

一方，蛭間裕人は小学校教員を定年退職した後，新日本文学の活動へ復帰した。また，清水清は読売新聞を定年退職した頃と同じく，4次『コスモス』の編集人となった。

3－3　その後の石垣りん

石垣りんは，『現代詩』通巻103号（1961年7月1日）の「今月のベスト・スリー」欄で，新人を評価する役割を担うことになった。「この欄担当の番が私にまわってきた。思いがけないこと。人の作品を選ぶ力は，まだ私にはない。それでいいと言う。あなたの勉強になりますよ。とは大層親切な編集者の心づくしだ。では勉強させていただきます。」そこから108号（1961年12月1日）まで毎号，担当することになった。「評価される」側から「評価する」側へと，とても大きな転機だったと思う。詩の好きな銀行員から，詩人へと羽ばたいた瞬間だったのではないだろうか。

1968年詩集『表札など』を思潮社から刊行し，それが翌1969年第19回H氏賞を受賞することになったのである。さらに1971年『現代詩文庫46　石垣りん詩集』が思潮社から刊行され，1972年第12回田村俊子賞を受賞する。その後，多数の詩集，散文集を出版した。

2004年12月26日逝去された。享年84歳であった。

3－4　その後の李錦玉

李錦玉の名前を再び聞くことになるのは，1968年であった。いわゆる「イムジン河」問題である。「イムジン河」は，もともと北朝鮮の曲で，1957年7月に発表されている。

この曲を，京都朝鮮中高級学校を訪問した松山猛が中学生時代にたまたま聞いたことがきっかけであった。「そのどこかものがなしいメロディーは，ぼくのたましいの純情を射ぬいてしまいました。」「友だちの文くんのお姉さんは，しばらくすると朝鮮語の歌詞と，1番の日本語の訳をメモしてくれました。そして文くんがそのメモと，朝日語小辞典の新しいのを学校で買って，ぼくにくれました。」「日本語の2番，3番の歌詞を，ぼくが書き加えることになりました。」

松山は後にザ・フォーク・クルセダーズの作詞を担当することになる。松山猛の『少年Mのイムジン河』に上記のいくつかの事情が書かれている。1966年に「イムジン河」は，松山猛の訳詞等で，ザ・フォーク・クルセダーズによって初演され，1968年3月「帰って来たヨッパライ」に次ぐ第2弾でレコードが制作された。

加藤和彦は「「イムジン河」は南北を隔てる河でもあるが，松山と私にとっては青春と成年を分かつ河でもある。」「この歌は松山が作詞したものでもなければ私が作曲したものでもない。はるか北の大地から，不思議な運命で我々のもとに届いた。しかし「イムジン河」に命を与えたのは，

我々であると思う。」「不遜を承知でこんなことを言う。「イムジン河」はイムジン河であって，リムジンガンではないのである。」と書いている。

きたやまおさむは「私たちは素朴に朝鮮民謡だと単純に思い込んでいたのだ。」と書いている。

しかし，発売前に数回ラジオにかけた後，当時の東芝音楽工業は「政治的配慮」から発売中止を決定した。松山猛やフォークルのメンバーたちは，朝鮮民謡だと考えていたのだが，北朝鮮で10年前に作られた曲であることが判明したのである。

この後，1968年11月に，ザ・フォーシュリークが出した「リムジン江」というレコードの日本語の訳詞者として，李錦玉が登場する。李錦玉が，もともと詩人であるということが，この起用の理由だったと考えられる。喜多由浩の『「イムジン河」物語』では，「レコードにある作詞者のクレジットは李錦玉となっているが，総連の傘下団体，文芸同（在日本朝鮮文学芸術家同盟）の音楽部長の李チョルウ他のメンバーも加わって合議で松山の二番とは違う日本語の訳詞を考えた」と書かれている。

さらに，李錦玉は，2004年『いちど消えたものは　李錦玉詩集』（てらいんく　子ども詩のポケット）で第35回赤い鳥文学賞，第9回三越佐千夫少年詩賞を受賞している。

また，朝鮮民話に基づいた『さんねん峠　朝鮮のむかしばなし』（1981年　岩崎書店），『よわむしごうけつ　ちょうせんのおはなし』（1981年　太平出版社），『へらない稲たば　朝鮮のむかしばなし』（1985年　岩崎書店），『りんごのおくりもの』（1987年　朝鮮青年社　朝鮮名作絵本シリーズ），『李錦玉・朝鮮のむかし話』（2009年　少年写真新聞社，3冊本）などを出版している。

2019年7月2日逝去された。享年90歳であった。

3−5　東京へ出た人びと

東京に出たことがわかっているのは，九州からの大場康二郎，井上光晴，谷川雁，北海道からの久保田俊夫，広島からの且原純夫の5人である。戦後復興期から高度経済成長期のこの時期は，無数の人びとが，農村から都市へ，地方から東京へ移動している。集団就職も含めて，空前の民族大移動の時代だったのである。それぞれ，上京の要因は多様である。

大場康二郎は，1949年家族で九州を脱出したのである。久保田俊夫は，1955年日本製鋼所室蘭製作所の大争議の終結後，東京に職を求めていった。この二人は追い込まれて，やむをえず東京へ出た。

しかし，井上，谷川，且原は，追い込まれてではなく，自らの意思で東京へ出た。この3人について，跡付けていきたい。

3−6　その後の井上光晴

上京した1956年に『書かれざる一章』『詩集　すばらしき人間群』『トロッコと海鳥』を出版している。この年，井上光晴30歳。

年譜には書かれていないが，上京してからは，『週刊新潮』で社外ライターの仕事をしていた。『黒い報告書』(新潮社編集部編)の「【黒い報告書】の歴史」によれば，齋藤十一の発案のこのシリーズは，1960年11月21日号から始まっているが，「連載が始まって間もない60年代の初期には，新田次郎や水上勉，城山三郎，井上光晴といった一流作家が執筆している。」とされている。

井上荒野の『ひどい感じ ── 父・井上光晴』にも書かれている。「父は一人先に上京し，『週刊新潮』の編集・取材の職を得て生活に目処がついてから，母を迎えに来た。」「1963年頃から，父は小説だけで生活をするようになった。母はいちおう専業主婦になった。」

1952年は，井上光晴にとって，無名と有名の分岐点であったが，その後間違いなく有名となった。多くの作品を残していることはいうまでもない。

1992年5月30日逝去された。享年66歳であった。

3−7　その後の谷川雁

1965年，谷川雁は上京し，株式会社テックに開発部長として入社する。この年，谷川雁42歳。

1966年，テックの一事業部門としてラボ教育センターを創立，常務理事となる。これは，子供を対象とした外国語習得運動の組織化であった。1967年6月専務取締役就任。1980年に，ラボ関係の職務を離れる。1981年「十代の会」を創立，1982年こどもたちを指導するテューターなど有志に呼びかけて「ものがたり文化の会」を発足させた。こどもたちの表現活動として「人体交響劇」を提唱した。

松本輝夫の『谷川雁　永久工作者の言霊』によれば，次のような経緯であった。テックとは，創業者の榊原巌・千代夫妻と息子の陽などによって起業された，三年足らずのベンチャー企業であった。榊原夫妻は，キリスト教社会主義者として著名な存在であり，日本社会党員であった。千代は戦後初の衆議院選挙に当選した国会議員の経験もあり，巌は青山学院大学教授であった。

> 「そうした経緯からして夫妻とも雁には好意を抱き，息子の陽も第一級の変わり者，切れ者であったぶん，詩人としての雁，工作者としての闘争歴には相当な関心を寄せていたにちがいない。大正鉱業闘争中も雁には多大なカンパを寄せていたはずだ。」

やがて，オーナーとの意見の食い違いから，袂を分かつのであるが，そんなことはベンチャー企業では日常茶飯事である。

榊原夫妻が着眼したように，谷川雁には天賦の企業家能力があったように感じられる。それは，サークル村，大正行動隊，大正鉱業退職者同盟からの連続性がある。外からは異質のように見えるが，本人にとってラボ教育センターあるいはその後の様々な活動は，まさに企業家能力の発揮という点で同質なのである。つまり大胆に言えば，工作者というのは，周囲を鼓舞して，全く新しいことに挑戦する企業家と同じ意味なのである。

1995年2月2日逝去された。享年71歳であった。

3－8　その後の且原純夫

且原純夫は，1953 年上京した。この年，且原純夫 24 歳。

『中野重治全集　第二十五巻』（第二次，1978 年 11 月，筑摩書房）の月報 20 に，且原純夫の「旧版全集編集担当者の弁」が掲載されている。その中に第一次全集（旧版）の編集経緯が述べられている。且原は『新日本文学』の編集者であった。言うまでもなく中野重治は，書記長・編集長・中央委員など長く新日本文学会の運営の責任者であった。（且原のことは，『中野重治書簡集』の古田晁宛書簡にも書かれている。古田晁記念館所蔵。）

「旧版全集ははじめ十巻の選集として企画された。筑摩書房の編集担当者は石井立さんであった。私は編集補助のアルバイターとして依頼された。石井さんの遺したノートによればそうではないらしいが，ともあれ，中野さんの文学活動を私なりに追体験してみようと考えていた私は，喜んで新日本文学会勤務のまま応じた。

（中略）

その間，石井さんは第一回配本を担当した後，長期療養に入り，加藤國夫さんに引きつがれた。

（中略）

しかし，加藤さんは平野（謙）さんの記憶とちがって，1963 年 9 月 30 日の全集完結後まもなく 11 月 29 日にやはり胃ガンで亡くなった。石井さんは翌 1964 年 1 月 3 日，心不全で逝った。みな，いま思いだしても胸がつまるようななつかしい先輩たちであるが，その人たちが万骨枯るとは私は思わない。中野さんの文学と人柄を敬愛したその人たちが，そのような思いを抱いたとも私には考えられない。」

加藤國夫は，壺井繁治・栄夫妻の娘婿である。また，「万骨枯る」とは，この当時，中野重治について，「一将功成って万骨枯る」という批判があったことに対する反論である。

『中野重治全集　第一巻』（旧版）は，1959 年 3 月 9 日配本であり，石井立はその直前，2 月に鎌倉・額田保養院での長期療養に入る。1960 年にいったん復帰するものの，健康を取り戻せず，長期入院が続き，1964 年 1 月 3 日逝った。享年 40 歳であった。

且原が「はじめ十巻の選集」と書くのは，1948 年から刊行された『中野重治選集』のことかもしれない。この時は，1・5・8・9 巻が未刊のまま中止されたのである。企画は，この選集の完結をめざしてはじまり，さらに全集へと規模を拡大させたと考えられよう。

新版第二次全集の編集者松下裕の『評伝中野重治』に次のような記述がある。

「中野文献を協力して少しずつ調べていた中西浩氏との関係から，わたしは，最初の十九巻本『中野重治全集』の編集を手つだうことになった。1959 年だったろう。その関係者の顔あわせという意味から，中野さん原さん夫妻に，春の一日，郊外の野猿峠行きにわたしも誘われることになった。中西浩，且原純夫，加藤國夫の若い編集者たちのほか，佐多稲子，壺井繁治というような人も来ていて，わたしは初めてこういう文学者たちをまぢかに見た。ほか

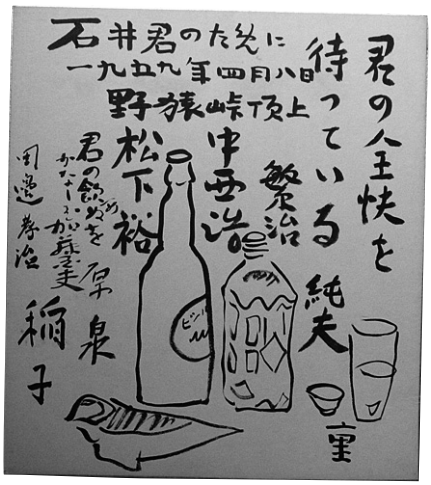

写真 2 「色紙　中野重治画」 石井立所蔵資料
(世田谷文学館寄贈)

に，新潮社の中野さん担当の田辺孝治氏が来ていて，写真をとってくれた。」

松下は，神奈川近代文学館の館報 116 号（2012 年 4 月 15 日）にこのときの写真を発表している。また，野猿峠で，参加者から入院中の石井立宛ての色紙（写真 2 ）が書かれている。色紙に名前のあるのは，中野重治，原泉，壷井繁治，佐多稲子，そして中野全集の若い編集者達，加藤國夫，中西浩，且原純夫，松下裕，さらに新潮社の田辺孝治の 9 人である。

さらに，若い編集者たちは下山後，新宿に繰り出し，大いに気炎をあげながら，石井立宛ての葉書を書き続けている。(この時の色紙と葉書，及び『中野重治全集』の編集を巡る加藤國夫，且原純夫などから入院中の石井立への書簡は，世田谷文学館寄贈)

且原純夫が第一次『中野重治全集』にどのように関与したのか，まとめておこう。

『中野重治全集』全 19 巻別巻 1　(1959 年 3 月-63 年 9 月）を刊行順に見ていくと，次の通りである。平野謙は解説を担当していた。

1959 年 3 月 10 日　第 1 巻　解説平野謙　解題（中西浩）
1959 年 4 月 30 日　第 6 巻　解説平野謙　解題（中西浩）
1959 年 6 月 10 日　第 2 巻　解説平野謙　解題（中西浩）
1959 年 7 月 25 日　第 7 巻　解説平野謙　解題（中西浩）
1959 年 11 月 25 日　第 9 巻　解説平野謙　解題（中西浩）
1960 年 1 月 10 日　第 4 巻　解説平野謙　解題（中西浩）
1960 年 4 月 25 日　第 8 巻　解説平野謙　解題（中西浩）
1960 年 9 月 25 日　別巻　中野重治研究文献目録（中西浩）中野重治研究について（松下裕）

1961 年 6 月 15 日　　第 15 巻　解説平野謙　解題（中西浩）
1961 年 8 月 10 日　　第 3 巻　解題（中西浩）
1961 年 11 月 10 日　第 5 巻　解題（且原純夫）
以降　いずれも解題（且原純夫）
1962 年　第 10 巻，第 11 巻，第 12 巻，第 13 巻，第 16 巻，第 17 巻
1963 年　第 14 巻，第 18 巻，第 19 巻

刊行順にみると，三つの転換点がある。なお，実際の編集段階での転換は，刊行時期のもう少し以前である。

（A）　石井立が 1959 年 2 月より，入院のため，編集から外れたこと
（B）　平野謙が解説から外された 1961 年 6 月と 8 月の間
（C）　解題が中西浩から且原純夫に代わった 1961 年 8 月と 11 月の間

転換点(B)について

『筑摩書房の三十年』（和田芳恵著）によれば，次の通りである。「『中野重治全集』の解説は平野謙ひとりが当ることになっていた。平野は遅筆家として知られているが，本文が校了になっても，解説が間に合わないため，配本が延びのびになっていた。ついに業をにやした編集部は，著者自身の解説に切替えることにして，平野謙から，癌の宣告をうけた思いがすると言われたそうである。」

これが，1961 年，編集段階では，もう少し以前のことであろう。

転換点(C)について

竹内（2015）も紹介しているように，解題を書いていた中西浩も編集途上で逝去されたのである（1961 年 1 月）。中西浩は，中野重治の参議院議員時代の秘書である。中西浩は，かなり先の巻（1961 年 8 月刊行の第 3 巻）まで，すでに解題を書いていたのであろう。

以降，且原純夫が，完成まで残りの解題を担当した。

さらに，且原は 1960 年代末からデザイン思想誌『デザイン批評』を編集する。『デザイン批評』は，編集委員会が粟津潔，泉真也，川添登，原広司，針生一郎の 5 名であり，編集人且原純夫，発行人萩原得司，風土社刊の季刊誌であった。ただ，個性の強いメンバーの集まりであり，その編集はなかなか大変だったようである。第 9 号（1969 年 6 月）の編集後記において，且原は次のように書いている。「本誌は，五人の名による責任編集，と銘うってあるにもかかわらず，責任のとり方が極めて曖昧であるから，これまでの経過の厳密な批判検討がなされない限り廃刊するほかない，という編集委員会の責任者の粟津潔のアピールにもとづいて，この号を出すにあたって，

二日間，計十数時間にわたり論議した。」その結果，一応続行することになったものの，粟津が書いた編集後記に，他の編集委員がクレームをつけた。粟津からは，これ以上の継続は無意味なので，解散したいという申し入れがあった。しかし，続ける意味があるという判断で，まだ具体策は決まっていないが，再出発したいという内容である。

結局，1970年に第12号を出して，終刊となった。

その後，且原は，1985年に『デザインされた木　木の文化・その歴史と現状』(筑摩書房)を出版した。日本木材開発株式会社専務取締役であり，日本建築セミナーを立ち上げ，その事務局長となる。木と木造建築のための新聞『木』(1960年から)，『たくみ』(1978年から)などをてがけた。

1998年に『且原純夫詩集　ジュラ紀の松』を刊行している。

2000年に逝去された。享年71歳であった。

4　おわりに

4−1　時代とともに

『祖国の砂　日本無名詩集』に登場してきた人びとの背景には，戦中から復興，高度経済成長という時代がある。

掲載詩のテーマを見ると，終戦後7年経った1952年であっても，まず何と言っても戦争の体験が大きい。兵役，そして海外，アジアへの，具体的には満州，中国，モンゴル，ベトナム，ビルマ，インドネシア，ニューギニア，台湾などへの進駐，戦闘そのもの，そしてそこからの復員について，多くの人びとが詩のテーマとしている。あるいは，満州などからの引揚，空襲，肉親や友の死などが詩のテーマとなっている。戦時における満鉄，学徒動員，徴兵忌避などといったテーマも背景にはある。

次いで，戦後のさまざまな労働のあり方も，多くの詩のテーマとなっている。農民，工場労働者，教員，銀行員，国鉄，新聞社整理部それぞれの働く場があり，あるいは古書商，大工，塗装工，印判業といった自営業，さらには内職という労働に従事している。そこでは，一人一人がさまざまな労働の課題に立ち向かっている。また，臨時工，進駐軍労務者，かつぎや，炭鉱夫などが詩に登場してくる。

仕事自体への愛着も詩のテーマとして描かれている。そして，それを示す，かしめ鋲，統計書，ペン・帳簿・算盤，エアー・ドリル，煤煙すなわち蒸気機関車，堆肥と馬橇，自転車，様々な仕事の道具が登場してくる。

しかしながら，1949年からのドッジライン，定員法による解雇，レッド・パージによって職を失い，ダメージを受けた人びとはとても多い。1952年において，無職あるいは自営業などへの移動を迫られている。戦後の日本は，「終身雇用」などという平穏な状況ではなく，解雇に次ぐ解雇

の嵐が吹き荒れた時代だったのである。1955 年，高度経済成長の始まりとともに，大規模な解雇はほとんど行われなくなる。

一方，1950 年からの日本共産党の分裂・対立も，人びとに大きくのしかかってくる。結果として，党員だったもののほとんどは，離党するか除名されている。

また，アメリカの占領が続いた直後，朝鮮戦争が日本の社会に大きな影響を与え，部分講和が占領期となんらの変化ももたらさないという 1952 年の状況も，詩のテーマとなっている。現在の視点から考えると違和感のある「祖国」という言葉がそれを示している。さらには，横須賀，佐世保，室蘭といった旧軍港や重化学工業地域への一時的な朝鮮特需とその後の深刻な不況，それによる解雇も，人びとに多大な影響を及ぼしている。

1954 年の日本製鋼所室蘭製作所の大争議，炭鉱の衰退，綴り方運動，戦争未亡人，在日朝鮮人，部落解放そして被爆者といった問題は，この時点ではあるいはこの詩集では必ずしも明示されていないが，人びとの背景を読み解いていくと，浮かび上がってくる。また，肺結核で療養所に病臥せざるをえない人びともこの時代にいかに多かったことか。

この詩集は，1952 年前後という日本の社会が，明示的にあるいは内包している課題，テーマを，ほぼ網羅しているといえよう。どこまで意図したかはともかく，74 人の詩人と詩を選択することによって，それを可能たらしめたのである。

4－2　無名の人びと

ほとんど情報が得られなかった人びとも多いが，74 人の詩人たちの戦中，戦後復興期から高度経済成長期の生き方について，できる限りの情報を入手して，そこから浮かび上がるエピソードを取りまとめた。

よく知られた人物の成功譚ではない。まさに「無名」の人びとが，その置かれた場で精一杯生きてきた事実の積み重ねである。職場で，あるいは社会に対して，積極的に関わろうと懸命になっている姿である。

繰り返しになるが，ぜひ強調しておきたい。きわめて印象的なことは，多くの詩人たちが，『祖国の砂　日本無名詩集』掲載以降も，詩人でありつづけたことである。詩を詩誌に発表し，詩集を，たとえ自費出版であろうと出版する。あるいは同人と語らい，自分たちの詩誌を刊行しつづける。多くの人びとがそのための努力を惜しんでいない。それだけ詩で表現したいことがあったのである。『祖国の砂　日本無名詩集』は，その出発点になったことだけでも，大きな価値を生み出した。『祖国の砂　日本無名詩集』に掲載されたことは，多くの詩人たちにとって，大きな出来事であり，その後の詩活動の原動力となっていったに違いない。あるいは生き方の原動力となったかもしれない。後日，『祖国の砂　日本無名詩集』に掲載されたことを，明記している詩人は多い。

少し拡大して解釈すれば，戦後から高度経済成長期というのは，このような「無名」の人びと

によって，形成された社会であったともとらえられよう。一人一人が多様であり，それぞれが直面した状況において，何とか「手立て」を尽くそうとする。そのような社会であった。且原純夫の言うように「万骨枯るとは私は思わない」のである。「無名」の人びとという生き方だったのである。

引用参考文献：

筑摩書房編集部編（1952）『祖国の砂　日本無名詩集』（筑摩書房）

秋山　清（1965）「『祖国の砂』と『京浜の虹』」『秋山清著作集　第 10 巻　文学の自己批判』（2006 年，パル出版）
秋山　清（1966）「人民詩精神」『同上』
秋山　清（1979）「「詩」のことばかり」『新日本文学』19　79 年 12 月号
浅井徹雄（1985）『浅井徹雄三十六歳火の詩集』（前田良雄編，私家版）
天野正子（2005）『「つきあい」の戦後史』（吉川弘文館）
雨宮昭一（2008）『占領と改革　シリーズ日本近現代史⑦』（岩波新書）
有馬　敲（2006）「石垣りんと『銀行員の詩集』」『詩人会議』44 巻 9 号
安藤美紀夫（1990）「略年譜」『日本児童文学』（429 号，安藤直樹作成）
飯田・清成・小池・玉城・中村・正村（1976）『現代日本経済史上・下』（筑摩書房）
石井　耕他（2010）「できるかぎりよき本　後編」『北海学園大学学園論集』第 146 号
石井　耕（2015）「戦後の可能性」『北海学園大学経営論集』第 13 巻第 3 号
石井　耕（2016）「転職 ── 高度経済成長の時代」『北海学園大学経営論集』第 13 巻第 4 号
石垣りん（1961）「今月のベストスリー」『現代詩』第 8 巻第 7 号
石垣りん（2005）『石垣りん　現代詩手帖特集版』（思潮社）
石垣りん（2015）『石垣りん詩集』（伊藤比呂美編，岩波文庫）
伊藤永之介（1955）『農民詩集』（新評論社）
伊藤習司（1957）『黒い兵隊』（先列編集部）
井上荒野（2002）『ひどい感じ　父・井上光晴』（講談社）
井上寿一（2015）『終戦後史　1945-1955』（講談社選書）
井上光晴（1956）「私の詩について」『すばらしき人間群』（近代生活社）
井上光晴（1977）「大場康二郎」『井上光晴集　戦後文学エッセイ選 13』（影書房，2008 年）
井上光晴（1989）「葱と激流」『無名時代の私』（文春文庫，文庫 1995 年）
井上光晴（1998）『井上光晴　作家の自伝 77』（松本健一編・解説，日本図書センター）
猪木武徳（2000）『日本の近代 7　1955-1972　経済成長の果実』（中公文庫，2013 年）
今井朝二（1972）『今井朝二詩集　車中の少女』（国鉄詩人連盟）
岩崎・上野・北田・小森・成田編（2009）『戦後日本スタディーズ①「40・50 年代」』，『同②「60・70 年代」』（紀伊國屋書店）
内田豊清（1977）『詩集　動く密室』（高田屋書店）
内田豊清（1978）『影の歩み』
宇野田尚哉（2013）「復刻版『われらの詩』解説」『復刻版　『われらの詩』』（三人社）
宇野田尚哉（2016）「1940 年代後半のサークル運動」『「サークルの時代」を読む』
宇野田・川口・坂口・鳥羽・中谷・道場編（2016）『「サークルの時代」を読む』（影書房）
えのきたかし（1971）『えのきたかし詩集　老狙撃兵』『別冊　えのきたかし追想』（私家版）

大場康二郎（1956）「解説」『すばらしき人間群』（近代生活社，井上光晴）
大場豊吉（1977）『大場豊吉詩集　すべて気休めの言葉は死ね』（噴火湾社）
小熊秀雄（1953）『小熊秀雄詩集』（筑摩書房）
押切順三（2000）『読本　押切順三』（秋田文化出版）
柏岡浅治（1953）「国鉄勤労詩運動の現状」『新日本文学』1953 年 7 月号
柏岡浅治（1983）「喜志邦三先生追悼」『国鉄詩人』149 号
且原純夫（1949）「俺たちはもうだまされない　日鋼同志の闘いをたたえる」『広島文学サークル』（第 3 号，復刻版，三人社）
且原純夫（1958）『詩集　戦いの日々』（飯塚書店）
且原純夫（1969）「編集後記」『デザイン批評』第 9 号
且原純夫（1971）「風俗を超えるデザイナーの役割」『新日本文学』1971 年 5 月号
且原純夫（1978）「旧版全集編集担当者の弁」『中野重治全集　第二十五巻』（第二次，1978 年 11 月，月報 20，筑摩書房）
且原純夫（1983）「反核の志」『新日本文学』1983 年 11・12 月号
且原純夫（1985）『デザインされた木』（筑摩書房）
且原純夫（1996）『ジュラ紀の松』（私家版）
金子光晴（1959）「今月のベストスリー　長沢弘泰」『現代詩』第 6 巻第 4 号
鎌田　慧編（2005）『「新日本文学」の 60 年』（七つ森書館）
鎌田　慧（2017）『声なき人々の戦後史　上・下』（藤原書店）
川口隆行（2014）「『われらの詩』と朝鮮戦争」『大阪大学　日本学報』33 号
川口隆行（2016）「被爆地広島のサークル詩誌の軌跡」『「サークルの時代」を読む』
喜多由浩（2016）『『イムジン河』物語』（アルファベータブックス）
木原　実（1986）『木原実全詩集』（オリジン出版センター）
草階俊雄（1970）「農村から出た一文学グループのこと」『われらの内なる反国家』（太平出版社）
久保田俊夫（1955）「その後の日鋼室蘭」『労働法律旬報』202 号
栗原・吉見編（2015）『ひとびとの精神史　1940 年代』，モーリスースズキ編（2015）『同　1950 年代』，栗原編（2015）『同　1960 年前後』（岩波書店）
国鉄詩人連盟（1959）『国鉄詩人連盟 10 年史』
小林英夫（2006）『満鉄調査部の軌跡　1907-1945』（藤原書店）
齋藤愼爾編（1996）「谷川雁略年譜」『谷川雁の仕事Ⅱ』（河出書房新社）
佐江衆一（2015）「中央労働学院と文藝首都」『神奈川近代文学館』128 号
酒井眞右（1973）『百合ばっつけの青春』（筑摩書房）
桜井哲夫（2007）『増補　可能性としての「戦後」』（平凡社ライブラリー）
塩沢美代子・島田とみ子（1975）『ひとり暮らしの戦後史　戦中世代の婦人たち』（岩波新書）
志賀英夫（2008）『戦後詩誌の系譜』（詩画工房）
志賀英夫（2015）『「戦後詩誌の系譜」の補充版』（詩画工房）
柴村羊五（1943）『日本化学工業史』（栗田書店）
柴村羊五（1959）『化学肥料』（有斐閣）
柴村羊五（1978）『北海の豪商　高田屋嘉兵衛』（2000 年再版，亜紀書房）
島西・下久保・谷合・梅崎・南雲（2014）「1950 年代日本の労働運動における文化活動と職場闘争　人権争議後の近江絹糸紡績労働組合の事例」『香川大学経済論叢』87 巻
清水　清（1991）『写実への道　その詩と批評』『別冊　回想　清水清』（私家版）
新潮社編集部編（2008）「【黒い報告書】の歴史」『黒い報告書』（新潮文庫）
新日本文学会編著（1952）『日本文学当面の諸問題　新日本文学会第 6 回大会報告集』（新日本文学会）
新日本文学会編（1993）『「新日本文学」復刻縮刷版』（第三書館）

須藤和光（1988）『須藤和光　作品と回想』（『須藤和光作品と回想』刊行会）
瀬下良夫（1979）『瀬下良夫先生・志道保夫先生退職記念論文集』（慶應義塾大学法学研究会）
全銀連文化部編（1952）『銀行員の詩集　1952年版』（第2集，野間宏・伊藤信吉選）
滝川貞夫（1996）『青春詩集　燃える海流』（私家版）
竹内栄美子（2009）『戦後日本，中野重治という良心』（平凡社新書）
竹内栄美子（2015）『中野重治と戦後文化運動』（論創社）
谷川　雁（2009）『谷川雁　詩人思想家復活』（KAWADE道の手帖，河出書房新社）
谷川　雁（2009）『原点が存在する　谷川雁詩文集』（松原新一編，講談社文芸文庫）
千早耿一郎（1992）「解説　戦死やあわれ　竹内浩三の詩」『「戦争と平和」市民の記録②　愚の旗　戦死やあわれ』（日本図書センター）
千早耿一郎（2004）『大和の最期，それから』（講談社）
塚本雄作（1951）「課題は何か　「新日本文学」と「人民文学」の問題」『新日本文学』1951年3月号
壷井繁治編（1948）『勤労者詩選集』（新興出版社）
坪井秀人（2017）「戦後民衆詩を思い出す　その一　連載　二十世紀日本語詩を思い出す23」『現代詩手帖』60巻5号（2017年5月）
鶴見俊輔・加藤新五・柏岡浅治（1955）「鼎談　詩と思想」『思想とは何だろうか』（晶文社，1996年）
東京新聞・中日新聞経済部編（2016）『人びとの戦後経済秘史』（岩波書店）
鳥羽耕史（2009）「サークル詩・記録・アヴァンギャルド」『戦後日本スタディーズ①』
鳥羽耕史（2010）『1950年代　「記録」の時代』（河出書房新社）
鳥羽耕史（2011）「「へたくそ詩」再評価のために　『祖国の砂』と『京浜の虹』の性格について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要　第3分冊』57号
鳥羽耕史（2016）「サークル誌ネットワークの可能性」『「サークルの時代」を読む』
中野重治（2012）『中野重治書簡集』（松下裕・竹内栄美子編，平凡社）
中村隆英・宮崎正康編（1997）『過渡期としての1950年代』（東京大学出版会）（中村隆英の同じ表題の論文が冒頭にある）
中村不二夫（2014）『戦後サークル詩論』（土曜美術社出版販売）
中村正則（2005）『戦後史』（岩波新書）
成田龍一（2012）『近現代日本史と歴史学』（中公新書）
成田龍一（2015）『戦後史入門』（河出文庫）
難波功士（2012）『人はなぜ「上京」するのか』（日経プレミアシリーズ）
錦米次郎（1977）『百姓の死』（風媒社）
根津壮史（2016）「京浜のサークル運動」『「サークルの時代」を読む』
日本製鋼所（2008）『日本製鋼所百年史』
野口悠紀雄（2015）『戦後経済史』（東洋経済新報社）
橋本寿朗（1995）『戦後の日本経済』（岩波新書）
浜田矯太郎（1948）「にせきちがい　福岡直次郎の手記」『コレクション戦争と文学11』（集英社，2012年）
播磨造船所（1960）『播磨造船所50年史』
半藤一利（2007）『昭和史残日録　戦後篇』（ちくま文庫）
半藤一利（2009）『昭和史　戦後篇　1945-1989』（平凡社ライブラリー）
平田由美（2015）「金達寿　「文学」と「民族」と」『ひとびとの精神史2巻』
蛭間裕人（2000）『小説「遠い壁」のための素描と覚え書き　記録『テアトロ』と染谷格と』（くるみ工房）
広田義治編著（2001）『日鋼労働者と主婦の青春上・下』（光陽出版社）
福永文夫（2014）『日本占領史　1945-1952』（中公新書）

福間良明（2017）『「働く青年」と教養の戦後史』（筑摩書房）
古川隆久（2016）『昭和史』（ちくま新書）
紅野・保昌・栗坪・小野寺（1977）『展望　戦後雑誌』（河出書房新社）
保坂正康（2013）『高度成長　昭和が燃えたもう一つの戦争』（朝日新書）
前田忠廣（1997）『国の大義の名のもとに　草莽の証言『私の昭和史』』（私家版）
松下　裕（1998）『評伝中野重治』（筑摩書房）
松下　裕（2012）「わたしあて中野さんの手紙」『神奈川近代文学館』116 号
松永浩介（1983）「ニューギニア敗走記」『月刊社会党』327 号
松永浩介（1991）『私のリアリズム　自伝風に』（私家版）
松本健一（2010）『谷川雁　革命伝説　増補・新版』（辺境社）
松本輝夫（2014）『谷川雁　永久工作者の言霊』（平凡社新書）
松山　猛（2002）『少年 M のイムジン河』（木楽舎）
水溜真由美（2013）『『サークル村』と森崎和江』（ナカニシヤ出版）
水溜真由美（2016）「国民文化会議とサークルネットワークの全国化」『「サークルの時代」を読む』
道場親信（2015）「江島寛」『ひとびとの精神史 2 巻』
道場親信（2016）「東京南部のサークル文化運動」『「サークルの時代」を読む』
安場保吉（1989）「歴史の中の高度成長」『日本経済史 8　高度成長』（岩波書店）
山崎正和（2017）『舞台をまわす，舞台がまわる　山崎正和オーラルヒストリー』（御厨他編，中央公論新社）
山田今次（1999）『山田今次全詩集』（思潮社）
雄別炭礦労働組合（1956）『創立十周年史』
雄別炭礦労働組合（1965）『雄労二十年史』
横須賀市（2014）『新横須賀市史　通史編　近現代』
吉川　洋（1997）『高度成長』（中公文庫，2012 年）
李錦玉（2004）『いちど消えたものは　李錦玉詩集』（てらいんく）
理論社編集部編（1952）『京浜の虹　労働者の解放詩集』（理論社）
和田博文・杉浦静編（2007-2010）『戦後詩誌総覧①-⑧』（日外アソシエーツ）
和田芳恵（1970）『筑摩書房の三十年』（筑摩書房）
われらの詩（2013）『復刻版『われらの詩』』全 2 巻別巻 1 付録 1（三人社，解説宇野田尚哉，川口隆行）

ジョン・ダワー（2001）『敗北を抱きしめて』（岩波書店）（原著は 1999 年）
アンドルー・ゴードン（2013）『日本の 200 年　新版』（みすず書房）
アンドルー・ゴードン編（2001）『歴史としての戦後日本』（みすず書房）（原著は 1993 年）